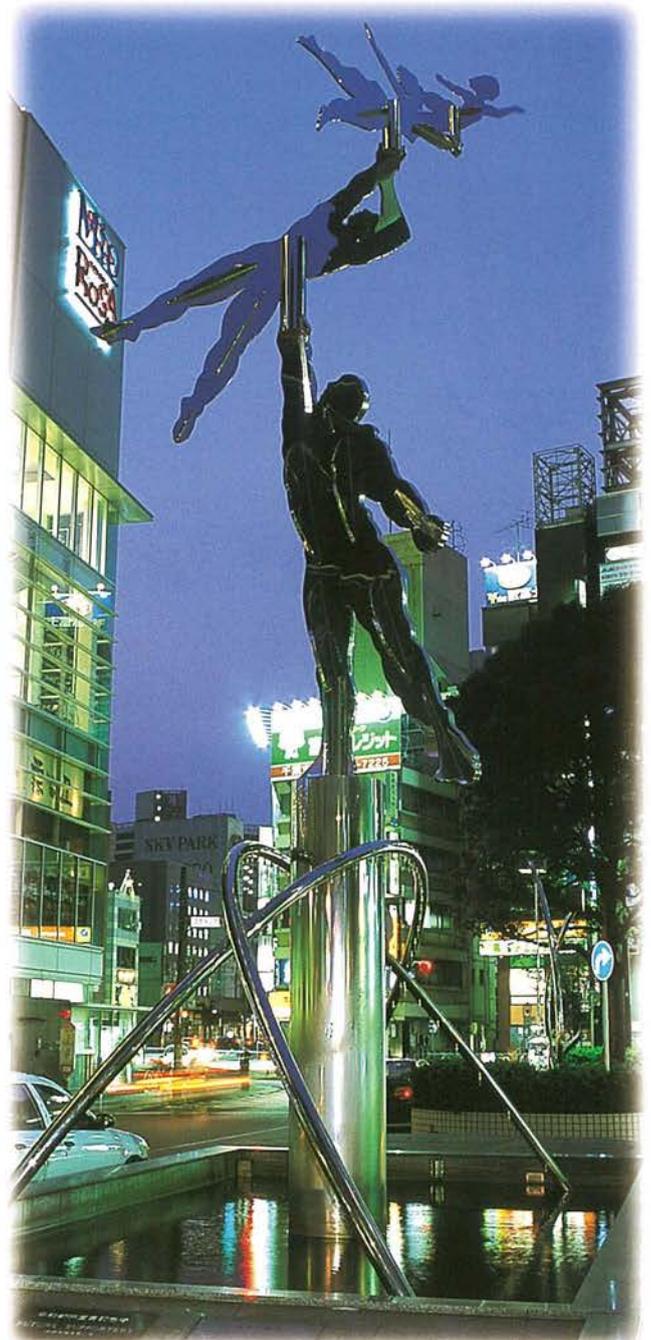


千葉市に生きる

夢 思いやり チャレンジ



千葉市教育委員会

はじめに

千葉市では、「夢と思いやりの心を持ち、チャレンジする子ども」を育てることを目標に、いろいろなことに取り組んでいます。

この資料には、皆さんもよく知っている加曾利貝塚や、千葉都市モノレール、稲毛の浜、そしてわたしたちが忘れてはならない七夕空襲の話が登場します。

ぜひ皆さんには、道德の時間の中で、資料に登場する人物の立場や気持ちになり、友達の考えを聞いたり自分の意見を述べ合ったりする中で、これまでの自分を振り返り、これからの自分の生き方・在り方を見つめていってほしいと願っています。

また、さらに夢を持ち、思いやりの心や目標に向かってチャレンジする気持ちや、心の中に育まれていくことを願っています。

指導課長 山本 幸人

目次

1	加曾利貝塚で	1
2	潮風が香る海にて	5
3	七夕空襲を語り継ぐ	9
4	見つめるまなざし	13

加曾利貝塚で

夏のある日、僕は友達の健太と加曾利貝塚へ出かけた。夏休みの宿題で、加曾利貝塚についてレポートをまとめる宿題が出たのだ。

正直言っただけが進まなかった。夏の日差しは強いし、加曾利貝塚の何をどうまとめたらいのかよくわからない。それに、資料集で見たことはあったが、あまり楽しそうなどころではなさそうだ。(あの、広くて丸い家があるところだよな。土器なんて興味ないし、貝塚ってなんだよ。)

博物館に向かっているとぼとぼ広い公園を歩いていると、小学生の子どもたちが、ボランティアのおじさんたちと一緒に火起こし体験をしているのが見えた。なかなか火がつかないようだ。(火を起こすのなんて簡単じゃないか。木をこすって煙を出せばいいんだろ。何がおもしろいんだよ。) そんなことを考えながら通り過ぎようとすると、

「君たちもやってみるかいい。」

と、おじさんに声をかけられた。

「え、僕はいいいよ。おまえやってみるよ。」

健太にそう言われ、仕方なくおじさんの近くにしゃがみ、道具を手にした。(木をこすればいいんだろ。わかってるよ。) やけになってこすってみたが、なかなか煙が出てこない。

「上の木を押すんだ。」



突然、おじさんが横から声をかけてきた。

仕方なくほんの少し上の木を押しした瞬間、煙が上がった。火種をくるみ、風にあてると、あっという間に火がついた。なぜかとてもうれしかった。

火起こし体験の後、レポートの資料を集めるために博物館に入った。すると、受付のすぐ横に、パンフレットがたくさん置いてあった。

「これをもって帰ろうか。」

突然、健太が言った。

「え、中を見なくていいの。」

「大丈夫だよ、これさえあれば何とかなるよ。」

後ろめたさを感じながら、僕はパンフレットを手に家路に着いた。家に帰り、パンフレットを開いてみたら、実際の貝塚が一体どのようなものか興味がわいてきた。実物を見てみたくなり、次の日にもう一度加曾利貝塚に行ってみた。



「今日も来たのかい。学校の宿題かい。」

昨日のおじさんが声をかけてきた。

「はい。加曾利貝塚についてのレポートが宿題に出されたのだけど、パンフレットを見たら、実物が見たくなって、今日も来ました。」

「そうか。大変だな。一緒にまわるか。」

と、言っ、展示室や公園内を詳しく説明しながら、案内してくれた。

「ありがとうございます。おじさんのおかげでだいぶ進みそうです。」

「また、わからないことがあったらいつでも聞きにおいで。」

夏休みも終わろうとしているある日、友達の健太にレポートのことを聞いてみた。

「健太、貝塚のレポート終わったか。僕、あの後、パンフレットを見たら実物が見たくなって、また貝塚に行ってみたんだ。そしたらあのおじさんが、貝塚を詳しく案内してくれたんだ。加曾利貝塚ってあんなにおもしろいところだとは思わなかったよ。」

「え。行ったの。」

「うん。縄文人の洋服も着てみたんだ。すごいよな。竪穴式住居にも入ったんだよ。それに、全国で二千三百ヶ所ある貝塚のうち、百十個が千葉市に集まっているんだ。あの広い公園の下には、まだ発掘されていない貝や土器がたくさん埋まっているみたいだよ。そんな大切な場所がこんな近くにあったなんて僕、知らなかったよ……。」

次から次へと言葉があふれてきた。興奮して話していると、健太がもう聞きたくない、という顔をして言った。

「はいはい。わかったわかった。何がそんなにおもしろいのかな。おまえって『貝塚おたく』だな。」

「……。」

貝塚おたく？僕が？……。思わず息をのんだ。何も言い返せない自分がいた。

ある土曜日、また加曾利貝塚に行ってみた。何度となく通ううちに仲良くなっていたあのボランティアのおじさんに会うためだ。僕は思いきって、健太に『おたく』と言われたことを打ち明けた。すると、おじさんは

「なつかしいな。おじさんも昔は変わり者扱いされたっけ。」

「え、おじさんも。何があったの。もっと聞きたいな。」
僕はびっくりして聞いた。

おじさんはしばらく遠くを見ていたが、ゆっくりと話し出した。

「昔、君と同じ中学生のころだったかな。自分の家の畑で黒曜石を見つけな。太古の世界に興味がわいてきて、いつしか取りつかれていくようになったんだ。そのうち周りからは変な奴だと思われるし、寂しかったよ。でもね、この加曾利貝塚はすごい場所なんだよ。日本中探してもこれだけ広い貝塚はまだ見つからないし、多くの縄文人がこの場所で生活していたんだ。そこに、今自分がいる。神秘的だと思わないかい。夢中になれることが一つ見つかったということは、すばらしいことじゃないか。」
おじさんの言葉を聞き、何だか心がすっきりしたような気がした。晴れ晴れとした気持ちになって家に帰った。

☆なぜ僕は、晴れ晴れとした気持ちになったのでしょうか。
☆あなたの興味があることや続けていきたいことは何ですか。



潮風が香る海にて

千葉市美浜区にある「いなげの浜」は、国内初、世界でも二番目となる人工海浜だ。空気が澄んだ日には、東京スカイツリーや富士山を見ることができ、絶景ポイントでもある。そのいなげの浜と隣の検見川の浜の間には、千葉市ヨットハーバーがある。大海原に、白い雲とさわやかな風、その風をいっぱいを受けてふくらむ純白の帆。ここは、自然の中でヨットを楽しむ人々にぎわう。

僕たちヨット部員は、土日、このヨットハーバーで、ヨットに乗る。平日の月曜日から金曜日は活動時間が短いため、学校でトレーニングをする。体力をつけるための筋力トレーニングやランニング、ヨットを操作するときを使うロープの結び方を覚えたり、素早く確実にできるように練習したりなど、やることはたくさんあり、どのトレーニングもヨットを上手に操作するために重要である。



「今日は校舎の周りを三周走って、その後、筋トレを行うように。」

部長が今日の練習内容を部員に伝えた。一年生は、先輩に聞こえないように、

「またか。つまらないなあ。」

「校舎の裏に行ったら歩いちゃおうぜ。誰が見てるってわけでもないし。」

「ちよっとくらい急けても、大丈夫だよなあ。」

それぞれに思いを口にした。入部したばかりの頃は、平日の練習にも黙々と取り組んでいたが、最近は、話したり、ふざけあったりすることが多くなっていた。しかも、誰もそのことを問題にすることもなかった。

（筋トレか……。毎日同じことの繰り返しで、面倒だなあ。実際に海に出る土日の練習にさえ、力を入れていけば、何とかなるだろう。）
僕は、そんなふうに思いながら、トレーニングをいい加減にやっていた。

次の大会で、僕はクラスメイトの誠と一緒まことに、二人乗りのヨットに乗ることが決まっていた。大会も近づき、誠はいつも以上にランニングや筋トレに精を出していた。誠よりも体が大きく、力も強く、大会の経験が多い僕は、平日のトレーニングに真剣に取り組む誠を冷やかな目で見ていた。

誠の姿を見た先輩たちが、

「誠、がんばってるなあ。おまえもしっかりやったほうがいいよ。」

「同じヨットに乗るんだから、経験豊富なおまえが、リードしていかないとな。」

と声をかけてきた。僕は、反発したい気持ちをもぐっと抑え、何事もなかったようにしていた。しかし、誠の方を向いて、

「誠が一人で、真面目にやっているから、先輩に注意されたよ。」
と、ぼそっとつぶやいた。そして、その場を離れた。

土曜日。潮風がそよぎ、波はとても穏やかで、視界は良好、まさしくセイリング日びより和

だった。二人乗りのヨットは、一人が前方に乗り、風の向きを考えて小さな帆を調節しながら、進行方向を決めて、後ろに指示を出す。もう一人は後方に乗り、大きな帆と舵を担当して、ヨットの向きを変える。どちらも大切な役割だが、後方がより重要だ。僕は先輩の言葉を思い出し、誠に言った。

「僕が後方に乗るよ。誠は、前方を頼む。」

「うん。わかった。」

誠は、了解してくれた。二人で乗り、声をかけあいながら、順調に進めていた。

沖に出たところで、次第に雲行きがあやしくなり、風が吹いてきた。

「風が次第に強くなってきた。気をつけて。」

「このくらい大丈夫だ。誠は前を見ていて。」

僕は、誠の言葉を軽く受け取った。今までの経験からまだ安心していた。しかし、突然、強風にあおられてヨットが横向きになり、ひやっとした。

「早く。早くしないと倒れる！」

誠の声が響いた。僕は自分の体重やカを利用して、バランスをとろうとしたが、もう身動きがとれず、傾いた状態を元に戻すことができなかつた。とうとう、ひっくり返り、僕たちは海に投げ出された。なんとか二人でヨットを起こし、ヨットハーバーに戻ることができた。しかし、転覆したのは、明らかに誠の注意を甘く考えていた僕の操作ミスだった。

陸に上がると、先輩たちが近づいてきた。

（絶対何か言われるに違いない。いやだな……。）

「おい、海を侮あなどるとああいうひどい目にあうぞ。」

「海の天気は変わりやすいから、いつ何時荒天に見まわれるかわからないからな。」
そう言って、先輩たちは立ち去った。

僕と誠は、二人きりになった。気まずい空気が二人の間をうめ尽くしていた。僕は誠の顔を見ることができなかった。誠は自分の荷物の中から、練習ノートを取り出した。そして、そのノートに向かって一人何か書いていた。

（何て言い訳しよう。あんな風は想定外だ。僕のせいじゃない。）
誠に近寄り、口を開こうとした時、練習ノートが目飛びこんできた。誠は、次の練習計画を立てていた。それも、風に対応するためのトレーニングだった。ランニングや筋トレに一生懸命取り組んでいた誠は、ロープを扱う練習が足りなかったと反省もしていた。

「次、がんばろうね。」

と、誠が僕に向かって、ほほえんだ。必死に言い訳を考えていた自分が、小さく思えた。

「ありがとう。」

自然と言葉が出た。この時、僕の中で確かに何かが変わった。

☆僕の中で変わったものとは、何でしょうか。

☆互いに学び合うためには、どんな姿勢が必要でしょうか。



七夕空襲を語り継ぐ

たなばたこうしゅう

僕の学校では、毎年一年生が、地域の方のお宅へ訪問し歴史について学ぶ「地域訪問」を行っている。今日、僕たちの班が伺うのは、戦争を語り継いでいる三橋さんというお宅だ。京成千葉中央駅付近で、学校からも近い。でもあまり乗り気じゃなかった。（やれやれ。戦争のことなら小学校でも勉強したし、面倒くさいな。）

「ようこそ、いらっしやい。」

三橋さんは、明るい声で僕たちを出迎えてくれた。机にはお茶やせんべい、戦争の資料や写真が用意されていた。

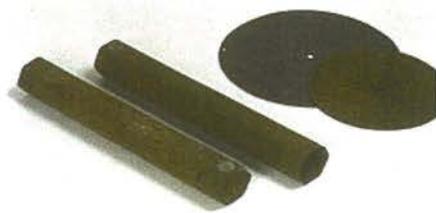
「太平洋戦争って知っているかい？」

「はい。一九四五年八月十五日に、日本はポツダム宣言を受け入れて無条件降伏しました。アメリカ軍の大型爆撃機B29が、日本の大都市をめぐってたくさん爆弾を投下したんですよね。」

はきはきと班長が答えた。それなら僕だって知っている。つい負けじと言ってみた。「広島と長崎に原子爆弾が落とされて、二十万人の人が亡くなったと学校で習いました。その他にも、東京大空襲があったんですよね。」

すると、三橋さんは、

「よく知っているね。東京大空襲は三月十日に行われて、たった二時間半の空襲で、



空襲で実際に使用された焼夷弾

八万人以上もの死者が出たんだ。」
と、うなずきながら話してくれた。

「じゃあ、君たちが住んでいるこの千葉市にも空襲があったことを知っているかい？」
（えっ、千葉市に空襲があった？ そんなの聞いたことないぞ。）

「終戦を迎える少し前の六月十日と七月七日。二度にわたる空襲で、約九百人の犠牲者が出たんだ。千葉駅の周りも、爆弾や焼夷弾で被害を受けたんだよ。七月七日の空襲を七夕空襲と呼んでいるんだ。」

それから一時間ほど三橋さんの話を聞き、僕たちは学校に戻ってきた。午後の授業は、地域訪問で学んだことを新聞にまとめる作業だった。僕が教室で新聞のレイアウトを考えていると、班長がこんなことを言い出した。

「千葉市にも空襲があったなんてびっくりだわ。しかも織姫様と彦星様が一年に一度しか出会えない七夕の日に空襲だなんて……」

僕は七夕に興味はなかったし、早く仕上げたかったので班長の話をさえぎった。

「何がオリヒメにヒコボシだよ。だいたい、七夕空襲って、東京大空襲とか広島や長崎の原爆に比べたら、犠牲者はたったの九百人だし、たいした被害じゃないだろ。」

すると、それを聞いていた担任の先生が、突然僕たちの会話に入ってきた。

「たいした被害じゃない？ 一体、地域訪問で何を学んできたんだ。」

僕はなんだか居心地が悪くなり、そのあとの新聞作りに集中できなくなった。

その日の帰り道。さっきの出来事が頭から離れず、家に帰る気にもなれなかった。

(なんだよ、あんな言い方しなくたっていいだろ……。)

なんとなく下を向いて歩いて歩いていると、辺りはすでに薄暗くなっていた。ふと前を見ると、京成千葉中央駅と書かれている。あ、三橋さんの家の近くだ。なんだか三橋さんに会いたいような、会いたくないような気持ちになった。

(あれ、何だろう?)

駅前のロータリーに人だかりができています。近づいてみると、数名の大人たちが、大きな笹を用意していた。どうやら七夕の笹飾りを作っているらしかった。その奥には「七夕空襲について語り継ぐ語り部が七夕に捧ぐ思ひ」という看板が立っていて、親子連れや大学生と思われる人たちが、話を聞きながら、短冊に何を書こうかとひそひそ話し合っている。

その時、僕は急に話しかけられた。

「やあ。今朝はどうも。」

あわてて後ろを振り返ると、三橋さんだった。

「なんだか浮かぬ顔をしているね。どうかしたのかい？」

その優しい笑顔を見ていたら、胸の奥のモヤモヤしたものを吐き出したくなった。「実は、学校に戻ってから地域訪問のまとめをしていた時、僕が七夕空襲の犠牲者はたったの九百人だからたいした被害じゃないって友達に言ったんです。そうしたら、先生に叱られてしまった……。」

それを聞いた瞬間、今まで笑顔だった三橋さんの表情がくもった。

「君は、人の死というものを身近に感じたことがあるかい？一人の人間の死と数十万

人の死。一体どちらが重いんだろう……。どの犠牲者にも家族がいたんだよな。」

僕は、思わずはっとした。

「この像を知っているかい？」

今まで何度もこの道を通ったことがあるけれど、像なんて目に入らなかった。

「これは、平和都市宣言記念像って言うんだ。千葉市空襲及び終戦五十年にあたり、戦争の悲惨さと平和の大切さを次代に伝えるために記念して造られたんだよ。君にはどんなふうに見えるかい？」

「うーん……。人が踊っている様子……。かな。」

「これは、人々が互いに尊重し、信頼し合いながら支え合っている姿なんだ。まるで、私の願いのもののような像だよ。私は、七夕の日に一人でも多くの人が、空襲を受けて亡くなった一人一人の冥福を祈ってくれたらうれしいと思っっているんだ。」

もう一度その像を見上げてみると、確かに人々が支え合いながら、天に向かって羽ばたいていた。僕はなんだか胸が熱くなった。

「三橋さん、僕にも短冊に願いの事を書かせてくれませんか。」

三橋さんは、ゆっくりと笑顔でうなずいた。

☆なぜ、僕は、三橋さんの言葉にはっとしたのでしょいか。

☆あなたなら、この短冊にどのような願いを書いてみたいと思いますか。



千葉都市モノレール
昭和63年に開業。市民の足として親しまれている。懸垂型モノレールとしては世界最長で、ギネス世界記録に認定されている。

見つめるまなざし

夏休みが近づいたある日、葉子は母と一緒にモノレールで千葉へ買い物に出かけた。新しいテニスシューズを買ってもらうためだ。中学生になり、部活動で忙しい葉子にとって、母との外出は久しぶりだった。ソフトテニス部の練習は厳しく、くじけそうになることもあった。しかし、そんな葉子を励ましたのは、由佳という、テニスがとても上手で、後輩にも優しい、あこがれの先輩の存在だった。その先輩に少しでも近づきたい、同じテニスシューズを買うことにしたのだ。

母に、その先輩が昨年度の大会で個人優勝したことを話していた。その時、スポーツセンターから高校生らしい集団が乗ってきた。中には、手にメガホンを持っている人もいた。高校野球の応援の帰りのようだが、試合で負けてしまったのだろうか、相手校への不満を大声で言い合っていた。

「あの場面で敬遠なんてずるいよね。」

「そうそう。正々堂々と勝負すればいいのに。」

「どうせ次は勝てないよ、あんな学校。」

話しているうちに、だんだん興奮してきたのか、高校生たちの声は車内中に響くようになっていった。

乗客たちの中には、眉をひそめる人もいた。

葉子は思わず母の顔を見た。母は何も言わず見つめ返した。



数日後、夕食の時、リビングに行くとき、父がテレビでニュースを見ていた。

「どうなっているんだろ？、最近の日本人のマナーは……。」

「え、なんのこと？」

「車内での迷惑行為だよ、見てごらん。」

葉子もテレビを見てみると、電車やバス、モノレールなど、公共の乗り物内での迷惑行為についての特集をしており、ちょうどそのランキングが映し出されていた。上位には、『ヘッドホンの音もれ』や『車内での飲み食い』、『携帯電話の使用』などがあげられていた。

「そうそう、この間もいたわよね、大声で話していた高校生たちが。」

と料理を運んできた母が会話に加わった。

「そういえば、今朝は通勤の電車の中で化粧している女の人もいたぞ。」

「えーなにそれっ、信じられない。」

「でも大人だけじゃないのよ。この間、私がモノレールに乗っていたら、中学生くらいの子が携帯ゲームをしながら乗ってきたの。前を見ないで歩いていたら、ちょうど降りようとしていたお年寄りにぶつかったのよ。それなのに謝りもしないのよ。」

「それは危ないな。葉子は気を付けるんだぞ。」

「わかってるわよ。」

と、葉子は不愛想に答えた。

夏休みになり、いよいよ総合体育大会が始まった。由佳先輩の活躍で、今年は団体戦

でも県大会に出場だ。

団体戦初日、葉子たち一年生部員は、先輩たちの応援のために試合会場であるスポーツセンターへモノレールで向かった。

団体戦はダブルスの三試合で、二試合とった方が勝ちとなる。葉子たちの学校は一回戦、二回戦と順調に勝ち進んだ。しかし、三回戦の相手は昨年ベスト4になった学校で、なかなか手ごわかった。最初のペアは接戦の末、なんとか勝つことができた。しかし、二番目のペアは応援おなしく負けてしまった。勝負は、葉子のあこがれの由佳先輩たちのペアに託された。試合は、点を取ったらすぐに取り返すという、両者ゆずらない熱戦が続いた。そして、とうとうファイナルセット。これをとった方が勝ちだ。葉子は応援席からコートに立つ由佳先輩をじっと見つめ、心からその勝利を願った。

由佳先輩のサーブ。鋭いかけ声とともに打たれたボールは、相手のコートに鋭く決まった。ゲームセット。これでベスト8入りだ。

「やったー！」

葉子は周りと手を取り合い、跳びはねながら大声で叫んだ。最高の気分だった。

試合終了後、選手たちとは別に、葉子たち応援の部員は先に帰宅することになった。帰りのモノレールは、思いのほか混んでいた。葉子たちは、ドア近くにバックを置き、さっそく今日の試合のことで盛り上がった。先輩の活躍を思い出し、葉子たちの興奮はまだまだ続いていた。

「先輩たち、すごかったね！」

「二試合目をとられた時には負けちゃうかと思ったけど。」

「そうそう、そのあとの由佳先輩たちの試合、最高だったね。」

「あの場面であんなサーブを決めるなんて、さすが、由佳先輩！」

「もう、涙が出てきそうだったよ。」

「私も。」

うれしさのあまり、葉子たちの声は自然と大きくなっていった。周りのことを気にすることもなく、会話は止まらなかった。

ふと気づくと、もう降りる駅だった。アナウンスとともに、モノレールは止まった。

「えー、もう着いちちゃったの？」

「そうみたい。早いね。」

反対側のドアが開いた。葉子はあわてて床に置いたバックを手に取り、急いで降りようとした。

その時、誰かが見つめている気がした。見ると、ドア近くの席に小学校低学年くらいの女の子がお母さんと一緒に座っていた。

女の子はじっとこちらを見ていた。

葉子はドキッとし、思わず目をそらしてしまった。



☆女の子の視線を感じた葉子は、どうして目をそらしてしまったのでしょうか。

☆社会の中で互いに気持ちよく生活するためには、どうすればよいと思いますか。

「道徳教育用教材（中学校 1 学年用）・千葉市に生きる」作成委員

●学識経験者

千葉大学教育学部 特命教授 土田 雄一

●委員長

千葉市立おゆみ野南小学校長 石野 高弘

●委員

千葉市立葛城中学校	秋葉 文彦
千葉市立稲毛高等学校附属中学校	岡村 忍
千葉市立加曾利中学校	梶原 明日馨
千葉市立山王小学校	川村 陽平
千葉市立磯辺中学校	久保田 美和
千葉市立轟町中学校	齊藤 優
千葉市立宮野木小学校	多田 幸城
千葉市立みつわ台中学校	谷川 めぐ美
千葉市立園生小学校	寺田 文子
千葉市立新宿中学校	原田 雅子
千葉市立川戸中学校	御橋 知世子
千葉市立鶴沢小学校	森 美香

●イラスト協力

千葉市立みつわ台中学校 門脇 郁実

●千葉市教育委員会事務局

指導課長	山本 幸人
指導課統括指導主事	福田 寛
指導課指導主事	尾高 正浩

平成 26 年 3 月

編集者 千葉市教育委員会

印刷者 株式会社 プリンテクス

発行者 千葉市教育委員会

千葉市中央区問屋町 1-35